

# 生徒の学校適応を目指した教育相談の検討

学籍番号 209201  
氏名 今川 恭成  
主指導教員 平井 美幸

## 第1章 緒言

筆者は中高生時代に勉強や部活動、人間関係において多くの挫折を経験し、学校に行きたくないと思うことが何度もあった。また筆者の身内には中学校3年間、不登校を経験した人がいた。身近な人が不登校になり、苦勞している姿を間近で見ていた筆者はその日から不登校を他人事のように思えないようになった。こうした背景から、筆者は大阪教育大学大学院連合教職実践研究科高度教職開発専攻援助ニーズ教育実践コースにおいて困りごとを抱える生徒をどのように理解し、教員として適切な関わりができるのかを学びたいと考えた。

本実践課題研究では、教員として生徒と関わる際に行っている工夫や考え方を明らかにするため、A学校における生徒の学校適応を目指した教育相談を検討することを目的に取り組んだ。

## 第2章 教員の受容的な態度を生かした支援の省察

第2章では、教員が生徒の良い面をさらに伸ばす関わりについて、および、教員の生徒個々への丁寧な関わりの工夫について着目し、①教員は生徒をどう理解し、生徒の成長を促す教育相談上の関わりをしているのか、②自身が生徒の立場にたって考えたとき教員の関わりをどう感じるのか、③教員の生徒への関わりによって、どのように生徒の学校適応が向上したのか、の3点から分析・考察し、教員が授業内で行う教育相談を検討することを目的とした。

その結果、生徒を優しく包み込むようなカウンセリング・マインドをもって、受容的・共感的な姿勢で生徒に働きかけることで、生徒からの信頼感を得ることや学習意欲の向上につながるとの示唆を得た。また、教員が授業内において生徒への指導・援助を行う際には集団と個の両面を意識した関わりを行うこと、とりわけ学業不振の生徒や学習へのつまずきを抱える生徒など不適応傾向にある生徒に対しては、個に配慮した教育相談上の関わりが有効であるとの示唆を得た。

## 第3章 不登校傾向の生徒に対する支援の省察

生徒の細かい表情や姿勢、発言等から生徒を理解し、教員が一人ひとりの特性や生徒の状況に合わせて柔軟に対応していることについて、および、生徒の良い面をさらに伸ばす関わり

りだけでなく、悪い部分を良い方向へと導くための関わりの工夫について着目し、①教育相談の中で受容的態度での関わりと生徒を律するために生徒自身で考え、判断させることで個の変容を目指す関わりとの兼ね合い、②教員の生徒への働きかけによって生徒が適応できたと考えられる部分だけでなく適応できなかった部分の要因、の2点から分析・考察し、教員が授業外で行う教育相談を検討することを目的とした。

その結果、生徒の指導・援助を行うためには生徒を集団として一括りに理解し対応するのではなく、集団の中でも一人ひとりの生徒は違った特徴をもち、それぞれに悩みを抱えている存在であることを理解し、個に応じた指導・援助を行うことが重要であるとの示唆を得た。また、不登校傾向にある生徒に対していつでも味方になるという姿勢を見せながらも、生徒が教員に対して心を開き自己開示をするまでどっしりと構え、生徒に無理をさせないように配慮しているとの示唆を得た。

## 第4章 成果および課題

教員として生徒と関わる際に行っている工夫や考え方を明らかにするため、実際の学校現場で行われている教育相談のエピソードを抽出し、プロセスレコードを援用して省察を行い、生徒の学校適応を目指した教育相談を検討した。その結果、授業内での教育相談においては教員の受容的な関わりによる生徒への援助や集団と個のバランスを意識した生徒への関わりが生徒の積極的な学習につながることを示唆された。また、授業外での教育相談においては、個に応じた指導・援助や生徒指導の場面において教育相談の姿勢や考え方を生かした関わりが一定程度の期待できることが示唆された。本実践課題研究では、生徒の学校適応を目指した教員の関わりはA学校における教員が行う教育相談であるため、本実践課題研究の取り組みはA学校のことでしかないという限界がある。本実践課題研究のような、教育実践においてプロセスレコードを使用したケース、とりわけ教育相談に焦点を当てたケースは数少ないため、本実践課題研究で明らかになる成果は教育相談の観点において新たなケースとして残すことができたと考える。また、生徒の学校適応を目指した教育相談の検討を行うことで、生徒がより学校に適応しやすくなるために必要な気づきを得ることができたとと言える。

## 第5章 結論

このように、実際の学校現場で行われている教育相談のエピソードを抽出し、省察を行い、生徒と生徒の学校適応を目指して教育相談を行う教員のやり取りから教育相談を検討したことで、教員として生徒と関わる際に行っている工夫や考え方を可視化し、教員が生徒一人ひとりの特徴や個に応じた生徒理解のもと、個別の指導・援助を行うことの重要性を示唆する知見を得た。これらは、教育相談の観点において新たな資料になり得たと言えよう。